

FUEIKI

VOL.62



特集

がんばる若者を応援

三好祐也さん

特集

がんばる若者を応援

病気で学校に行けない子どもたちを
勇気づけ、見守り、寄り添い支える

NPO法人ポケットサポート代表理事 三好祐也さん



小児がんや、心臓病など慢性的な病気によって長期の入院や自宅療養を余儀なくされている子どもたちは、病気だけでなく、学校生活や社会生活にも不安を抱えながら療養生活を送っています。そんな子どもたちを勇気づけながら温かく見守り、寄り添い、支援活動をしているNPO法人ポケットサポート。代表理事の三好祐也さんにお話を伺いました。

——活動を始めるきっかけについて教えてください。

三好…正式にNPOを立ち上げたのは2015年11月11日ポッキーの日です。大学生の頃から岡山大学病院の中にある院内学級でボランティア活動をしていました。僕自身が小さい頃からずっと慢性的な病気で入院を繰り返していて、義務教育のほとんどを院内学級で過ごしてきました。大学生になって通院しているときに、ナースの人から「大学生で暇じゃったら、院内学級の手伝いでもらおうなん」と言われたのがきっかけで、学習支援のボランティアを始めました。入院している子どもたちは、横のつながりがありなくて友達も少ないんです。退院した子どもたちも同じです。もっと交流みたいなのがあればいいなと思って4年前、僕の地元の直島に子どもたちを連れて行ったのが交流イベントの始まりです。

個人でやってきた学習支援の活動とボランティアたちに手伝ってもらった交流イベ

ントが合わさったのが、今のポケットサポートの原点です。

——NPOを立ち上げてから活動に変化はありましたか？

三好…根本は変わりませんが、NPOになってからは、「伝えること」「続けていくこと」「つなげていくこと」を常に意識しながらやっています。

これまで思ってきたことや経験してきたことを一緒に活動してくれている仲間たちに伝えていくことと、子どもたちと継続してかわつていくこと、ずっといい関係で成長を見守りながら繋がっていたい。

入院中も退院後も不安とか悩みとかが出てきた時に話を聞いたり、久しぶりに会って顔を見たりとかして切れ目のない支援みたいなのができたらいいな、と思っていました。今まで以上にいろんな責任が伴うと覚悟もしています。

——ご自分の体験をベースにして生まれた活動ですか？

三好…子どもって学校がないと本当にすることがないんですよ。入院していると退屈な時間が多いですから。検査とか治療がなければずっとベッドの上にいるしかなくて、病気の自分しか想像できなくなってます。

僕が入院していた時代は、ほとんど院内学級で担任の先生や友だちと過ごしていました。が、卒論を書きに来た学生や看護実習、小児実習の学生たちが来てくれたときは、とて

も楽しかったことを覚えています。誰かが来てくれて、話し相手になつてくれたり、一緒に勉強を見てくれたりするときは、子どもらしい時間に戻れました。算数の問題を解いているときや英語の単語を覚えているときは、僕は病気だつて思っていないで、入院する前の学校に行つて友達と過ごしていたという、そういう場所に戻れるのかなと思います。

——子どもたちとのふれあいの中で、忘れないことは何ですか？

三好…この活動を始める大きな契機になった出来事があります。中学3年生の冬に入院してきた男の子がいました。その子はサッカーをずっとやっていた、ユースのチームに選ばれるくらいのすごい選手でしたが、病気になるってしまったってスポーツもできなくなっていました。自分のアイデンティティが崩れてしまったんです。だけど院内学級に通い始めて、同じような境遇でも頑張っている友達や相談に乗ってくれるボランティアの学生、勉強を教えてくれる先生たちと関わっていくうちに、ちよつとずつやる気を取り戻していった、受験勉強も頑張つて合格しました。それが僕の母校でした。

退院してからも、例えば「学校が楽しい」とよく話してくれるようになって、「ああ変わったなこの子は」と思いました。そのうち、僕が教育実習で偶然にも彼のクラスに行くことになったんですが、その矢先、また病気が再発してしまつた。ベッドの中で「三好君の授業を受けたかったなあ」と言いながら入

院生活が始まりました。

それまでは治療にもあまり積極的ではなかった彼ですが、高校に行つて勉強したり友達と遊んだり、高校生活を楽しくできたことで、治療にも前向きになっていました。あるとき「僕、大学生になりたい」と言うので、「何で？」と聞いたら、「三好君の姿を見ていたらすごく楽しそうだから、大学生がいいかなと





思つて」と言ってくれました。病氣になって、入院して一旦は落ち込んでいた彼でしたが院内学級での経験から、彼がまた新たな目標を見つけて、生きる力というか、生きる意欲みたいなを感じられた瞬間に立ち会えたんです。これって、本当にうれしいできごとでした。

彼の姿を見て、自分の未来を想像できるから頑張れる、それって生きることにつながる力になるんだと、そのときに強く感じました。

——この活動において三好さんの存在は大きいですね。

三好…病院内は横を向いたら病院の人しかいないし、院内学級は先生と生徒の立場ですから、もちろんその中でいい環境を作つてくれていると思いますが、第三者というか、普通のお兄ちゃんとかお姉ちゃんとかみたいな関わりのできる人が必要なのではないでしょうか。それと、自分の置かれている環境もすっかり理解してくれる人がいるということが、大事だと思います。いや、理解だけでなく想像力とか、その人がどういふ思っているかということとを理解のもう一歩前の想像しようとするみたいなことが大事だと思つています。

——ポケットサポートの名前はどのような意味ですか？

三好…ポケットというのは、そもそも病氣とかで入院したり治療をしたりしなければならなくなつたときに生まれる、学習とか体験とか生活とかの中の空白の部分の意味です。そういうポケットを持つ彼らをサポートしたいという思いから、ポケットサポートと名付けました。

彼らは、病氣だから仕方ない、できなくて仕方ないつてよく言いますが、勉強ができないのも、遊べないのも、家族と過ごせないのも、本当に仕方ないことなのか、できないことなのか、というのを常々思つていました。できないということ自分の存在を消すというか、薄められる気がしています。病氣でもこんなことやあんなことができたと言えることがいふばあると思うし、病氣になつたからこそ逆にできる部分とか見える

るということを地域や社会に知ってもらえるような活動もやつていきたいなと思つています。

一番大きいのはやはり教育の問題です。特に、高校は義務教育ではないので、いくら学習とか勉強を頑張つても出席日数が足りなかつたり、単位にならなかつたりして留年したり、卒業できなかつたりします。これではこれからの道を閉ざされるような気持ちにもなります。そこを何とかできないかなと。アイデアとしてあるのは、フリースクール

部分があるはず。そういうことを大事にして、空白のポケットを満たしてあげたいと思つています。

ポケットサポートのスタッフの中には、僕自身もそうですが、幼少期からの病氣経験者の仲間が活躍してくれています。彼らは病氣を苦にせず、むしろそれを一つの経験とらえて、今の自分の生き方で生きているので、そういうことも伝えていきたいと思つています。

——これからこの活動をどのように広げていきたいと考えていますか？

三好…今は社会保障費の抑制みたいなことがあつて、入院は短期にし通院治療させる方針が変わつてきたという背景があります。退院したらすぐに元氣になつて、学校にも通えとみんな思っていますが、そんなことはありません。病氣によつてはここからむしろ戦いが始まるくらいの感覚です。病院のようにきちんと管理された中ではない自分、すごく大変なことなんです。そんな子どもたちはいろんなところにおいて、病氣で何もできない自分、学校に行けていない自分をすごくマイナスのイメージに捉えています。君らにはできることがいふばあるし、頑張っているあなたたちを私たちは見ているし、これからもずっと応援したいと思つているというメッセージを常に伝えていきたいと思つています。そのためには、その子たちがどこにいて、何に困つているかという実態や状況を知らなけ

や通級指導教室というシステムを病院の中に作つて、自分の学校に籍を置きながら、そこに通つて勉強すればそれを出席にカウントできる。試験もそこで受ければ単位もとれるというシステムを作れないかと考えています。

ポケットサポートのような活動をやっているところは全国でも少ないので、ポケットサポートの活動が岡山モデルとしていろんな地域に広がっていくようにしたいなと思つています。



三好祐也(みよし ゆうや)

NPO法人ポケットサポート代表理事

香川県直島町出身。岡山県岡山市在住。5歳で慢性的ネフローゼ症候群を発症し岡山大学病院へ入院。小学3年生の頃より入院中の子どもたちが通う「院内学級」で学び、中学2年までの義務教育のほとんどを病院で過ごす。岡山大学経済学部入学後、大学1年生の頃より、同病院の院内学級にて学習支援ボランティアを開始する。そこで多くの子どもたちと出会い、自分と重なる彼らに共感し、活動を続ける。自分が通っていた頃から変わらない教育環境に疑問を感じ、岡山大学大学院保健学研究科へ進学し、病氣の子どもたちの教育について研究。その頃に出会った仲間たちと2011年「ポケットサポート」を発足し、退院後の子どもたちを集めての交流イベントを開始する。2015年に病氣の子どもたちの学習や復学、自立支援や交流支援を行う「NPO法人ポケットサポート」を設立。自らの経験を通じて、10年以上にわたり病弱児への学習・復学などの活動の傍ら、彼らの自立支援や環境理解についての講演活動も行う。講演は学会や大学、小・中・高等学校、福祉関係などに対し多岐にわたっている。現在も病氣の治療を続けながら活動をしている。

NPO法人ポケットサポート

<http://pokesapo.wixsite.com/pokesapo>

地道な活動、幅広い取り組みに光を当てる

平成28年度

福武文化賞、福武文化奨励賞を贈る

— Junko Fukukake Hall, 2016.10.14 —

福武文化賞



太田三郎氏／美術家

切手をモチーフとした現代美術作家として国際的に活躍する一方で、「美作三湯芸術温度」など岡山県のアートプロジェクトにも積極的に参加し、若手作家をけん引する作家としての役割も担う。さらに津山市を中心とした県北エリアで活動するダウンスピードの会では、子どもと一緒にグッズを制作し、手指の訓練と経済的自立を試みたり、津山市の特産「横野和紙」の商品開発や需要の拡大に取り組むなど、自身の制作にとどまらない活動が高く評価された。

文化芸術の土壌が息づく岡山

福武文化奨励賞に続き、福武文化賞をいただき、たいへん名誉に感じています。作品をつくることは、私が好きでしていることだし、与えられた仕事、出会った仕事をやってきただけで、文化に貢献したかどうか自信はないですが、必要とされているのであれば岡山の地でしっかりと活動をしていこうと素直に思っています。

文化面で活動している人を顕彰してくれたり、助成してくれる福武教育文化振興財団のような財団がある県は少ないのではないのでしょうか。文化芸術に対する土壌は大原美術館から脈々と息づいていると思います。



受賞したことが広く報道されることによって、一般の人たち、普段僕が何をしているのか知らない人たちにも知ってもらえる機会になって嬉しい

です。アーティスト（表現している人）は、好き勝手に生きているように思われがちだけど、認められることによって活動がやりやすくなるし、地域社会の中での評価と新しい仕事につながっていきます。

福武文化奨励賞

片山康之氏／美術家

2008年に岡山県展彫刻部門で山陽新聞社大賞を受賞、同年日展では「豊かな感性と彫刻表現の今を感じさせる」と特選に輝き、岡山の現代美術を担う気鋭の彫刻家として成果を披露し続けている一方で、閉館した美術館を現代アートで新たに再生しアーティストと交流できる美術館として再生したり、小学校の空き教室をギャラリーとして活用する試みはユニークで、地域活性化の視点からも高い注目を集めている。

新たな挑戦のきっかけに…

再生させた吹上美術館を松島という島に移す理由は、今後どうステップアップしていくかを考えたときに、自分たちにはできないようなこと、ここでなくてはできないことを強めていくには島だと思ったので決めました。海に向こうはハードルが高いと思われるけど、下津井自体が島みたいなものだから。

自分では、正解なのかどうか、意味があるのかどうか、手探りで活動をしているところがあつたので、受賞という目に見える形で評価してもらえたのは、すごく嬉しいです。社会的な認知、客観的な評価を得られました。作家として創るだけではなく、社会の中での評価は後押しになります。地域活動でも具体的に評価してもらえてとても感謝しています。この受賞をきっかけに、新たな活動にも挑戦していきたいです。



第17回目を迎えた福武文化賞には、太田三郎氏、福武文化奨励賞には、

片山康之氏、岸本和明氏、平井優子氏、

特定非営利活動法人倉敷町家トラストが選ばれた。

岸本和明氏／奈義町現代美術館長

世界的な建築家磯崎新によって設計され平成6年に開館した奈義町現代美術館の準備室から企画・運営全般に携わり県北を代表するアートの拠点に育て上げる。美術館の新たな魅力と可能性を求めていく試みを継続する中で、岡山県美術館展の審査委員や美術三湯芸術温度のキュレーターなども積極的に務めるなど地域活性化の推進リーダーとして更なる活躍が大いに期待されている。



裏方の仕事に誇りをもって…

人と人をつなげることが、自分としては好きなことでもあり、役割だと思っています。それが、この賞につながったと思うとたいへん光栄です。美術館長をしながらキュレーターを務めたとき、周り方からは、忙しくて大変そうだと頑張つてとたくさんの声援をいただき

空間と関わっていく身体表現を…

岡山県のアートプロジェクト事業に参加するときには、いろいろな人とコミュニケーションが取れるような活動ができるだけ心がけています。空間にとっても興味があるので、身体が動いていると面白いと思うような場所で踊ることが好きです。空間と関わっていく身体ということではダンスのアプローチをしてきました。ホールは、遊びがいのある空間なので、そこから動きがでてくるという考えかたでダンスを創りました。ダムタイプの作品を観ていただいた方からは、身体をもっと前に出して欲しいと言われたりしますが、空間が映像で大きく変わったり、一つの建築のように展開したりする中で身体がどう変わっていくのかということを考えて、振付をつくっていくことが私のダンスです。



ました。確かに大変でしたが、やりがいのあることだったし、楽しみながやらせていただきました。ありがたいことに健康だから活動できています。

裏方の仕事なのに、福武文化奨励賞という光を当てていただき、認めてくださったことは、後進のためにも、やってきてよかったと思っています。孤独感を味わうこともありますが、人と同じことをするのは好きではないので、美術館の運営は、自分的にはフィットしていると思います。

平井優子氏／ダンサー・振付演出家

ソロパフォーマンス活動や他ジャンルのアーティストとのコラボレーションなどを通して日々研鑽を積みながら世界的なパフォーマンス・グループ「ダムタイプ」のメンバーとして第一線で精力的な活動を展開する中、演出振付家としても岡山芸術回廊をはじめ県内の様々な事業に積極的に参加し熱意と郷土愛をもって地域文化の普及に取り組み、今後益々の活躍が期待される。



中村泰典氏／特定非営利活動法人 倉敷町家トラスト代表理事

『まちに灯をともし』を合言葉に平成18年に設立以来、倉敷美観地区とその周辺地域の歴史的建造物の調査を行う。町家の改修再生、まちづくりの手法、地域との連携、町家の公益的利活用、高梁川流域のまちづくり団体との連携と活動、町家クラスの暮らし文化の体験活動など、総合的な地域づくりと暮らし文化の発信で魅力的で豊かな地域づくりに貢献し、高い評価を得ている。

総合的な町づくりを…

ハード整備をしている団体なので、福武文化奨励賞を受賞と聞いたときには、驚きました。建築文化という側面もあると思うけど、暮らしと文化が評価されたのかなと思います。事務所を修理し、地域にかかわり始めて、まちづくりについて改めて考え、コミュニティというものをもどくようにしていくかという方向に活動が変わってきました。

評価の言葉で気づくことがあります。例えば、景観大賞のときは「平仄（ひょうそく）」という言葉。つじつまが合うという意味で、あなたがたの活動と地域が変わっていくことが合っていると評価されました。自分たちが考える平仄はただ単に、お店ができて賑やかになるのとは違って、人が住んでコミュニティをつくるということ、つまり暮らしと文化です。

今回の評価の中の、総合的な町づくりと評価されたのは初めてで嬉しく思ったと同時に、町家改修もきちんとしなくてはと改めて感じました。





高校生のユニークな感性で 「国吉康雄」グッズをつくる！

2016年10月22日〜23日、ルネスホール(岡山市)で開催された国吉祭で、国吉康雄の作品を使ったグッズを製作し、販売した岡山市立岡山後楽館高校の生徒有志グループ「クニヨシ部」をご紹介します。



後楽館高校ってどこにあるの？

公立で全国初の併設型中高一貫教育校として平成11年に開校。天神町にあった旧中国四国農政局庁舎を仮校舎として使用していましたが、平成24年からは旧南方小学校の跡地に完成した7階建ての新校舎に移転するとともに、定時制から全日制課程に移行して今日に至っています。天神町は国吉康雄が生まれた出石町の隣町です。



どんな校風？

「自分で創る学校生活」を大切にしています。例えば、豊富な科目群の中から自分の興味や関心がある授業を選択する「自分でつくる時間割」や校則は「社会のルールとマナー」「自由服」「授業の始業・終業を告げるチャイムなし」などとしています。生徒が積極的に地元地域と交流することも応援しています。



クニヨシ部ができたきっかけは？

「国吉のグッズを作ってみませんか」と才士真司准教授(岡山大学国吉康雄寄付講座)が井手元啓江教諭(後楽館高校・美術)に提案したことが始まりです。2014年は「うちわ」と「レターセット」をデザインして「岡山国吉康雄展」(岡山シティミュージアム)で販売、2015年は「国吉康雄フラッグ」を制作して国吉祭in2016吹屋で展示。2014、2015年は美術の授業で取り組みましたが、2016年は「本気でやる気のある生徒を募集」と井手元教諭が呼びかけ、1年生から3年生の約20名の希望者が集まりました。



どうやって作っていった？



どんなグッズを作った？

8月には出石しろまち工房で開かれている出石国吉康雄勉強会に参加しました。

「安眠を妨げる夢」のマスクングテープやティンダラー、「曲芸師」のポチ袋、「ミスターエース」のクラウンのレターセット、「ここが私の遊び場」今日はマスクをつけよう」のメモ帳、「母と二人のこども」のトイレレットパーカー、二人の赤ん坊のTシャツ、その他缶バッジや一点もののブローチなど9アイテム。デザインに使用した作品は、福武コレクション(所有者：福武總一郎)の中から選びました。



この取り組みで感じたことは？

自分たちの商品を手に取ってもらって買ってもらえたとき幸福感であふれた。みんなで頑張ったことが認めってもらえたことが嬉しかった。

グッズを作ることも楽しかったけど、才士さんや大学生、買ってくれた人や国吉祭に来てくれた人たちと話ができ、世の中には面白い人がたくさんいるんだと、世界が広がったこと。

自分の好みだけではなく、買い手がいることを意識してデザインをした。将来デザインの仕事をしたい私にとって、とても意味のある経験になった。



実際に初めて国吉の絵をみたとき、とっても自分好みの色合いと形だった。楽しかったので、もっともっとこういう体験をしたい。

自分の考えたデザインが形になったときは嬉しかった。みんなのアイデアを聞いていると自分のアイデアもどんどん浮かんできたのが面白かった。

国吉がめちゃ好きになった。国吉祭が終わって直島に行ったとき「ミスターエース」の作品と再会して嬉しかった。

たくさんの方と関わってできた一つの商品が売れたときの喜びが経験できてよかった。

商品ができるまでの段階を知ることができたことが自分の中ではとても大きなことだった。

倉敷トワイライト
ホームの食卓

紀奈那・文



倉敷トワイライトホームは、川崎医療福祉大学の大学生が主体となって活動しています。活動は週3〜4回、民家を借りて、大学生と子どもたちが夕方から夜までを一緒に過ごします。大事にしているのはアットホームな雰囲気。くつろぐ様子や響き渡る笑い声は自分の家で過ごしているかのように感じます。家でも学校でもない第三の居場所がこの倉敷トワイライトホームです。

ここで食べる夕食はすべて学生が作ります。男子学生も女子学生も、ひとり暮らしや実家暮らしだって関係ありません。料理が苦手な学生も携帯片手にレシピを見ながら4人分、多い時には8人分のご飯をせっせと作ります。食べ盛りの子どもたちはお肉が大好き！子どもたちが美味いと言ってくれるようなご飯を作りたいと常々思っているものの、1日の予算内に収めるのは一苦労。それでも子どもたちの「美味しい！」を聞くために試行錯誤しながら頑張っています。

夕食の準備中、「漬物って自分でつくれるん！？」作り方教えてー！と台所に走ってきたり、「俺卵焼き得意なんよ！」「家では卵焼き作る係なんで！」とみんなのために一生懸命作ってくれたり……。一緒に台所に立つことで子どもたちの普段の生活を知ることができます。

活動を始めたころは野菜の切り方さえ分からない学生もいました。時には失敗

することだってあります。カレーが粉っぽいとか、ごま油を買い忘れるとか……。もちろん次は失敗しないように工夫しようと思えます。でも、これはある意味チャンスではないかと考えます。なぜなら、「大人になっても失敗することはある」「いつも完璧である必要はない」と子どもへ伝えられると思うからです。

食卓を囲むと色んな会話が飛び交います。小学校の友達と好きな人の話をしたとか、中学校で部活するのが楽しいとか、大学でレポートを出すのを忘れていて先生に怒られたとか。

私たち大学生も子どもたちの前で、ありのままの自分で過ごします。「失敗しながら大人になっていく、だから失敗することは悪いことではない」と子どもたちに伝えたいから。

本当の家族ではないけど私たちにあって本当の家族みたいに大切な存在の子どもたち。そんな彼らがいつでも来れる居場所をつくり、嬉しい時も悲しい時も気づけば傍に居るお兄ちゃんやお姉ちゃんのような存在になることが私たちの夢です。

倉敷トワイライトホーム

様々な理由で親が家におらず、夜をひとりぼっちで過ごしている小・中学生を対象に、公園で一緒に遊んだりご飯と一緒に作って食べるなどの生活支援や地域住民と協力し子どもの成長を支える居場所づくりを目指す。川崎医療福祉大学子ども支援サークルに属する大学生が主体となり活動している。

「親の背中を見て子は育つ」

父と一緒に遊んだという記憶は薄いのですが、小学校3年生の頃、ろくろ轆轤を引いている父にちよっかいを出して壺がぐちゃっとつぶれたことがあります。そのときは、50mぐらい追いかけられて、泥のついた手で顔をなでられました。叩かれたりはしなかったのですが、泣きじやくりながら家に帰ったことは今でも鮮明に覚えています。父は朝から夕方まで工房で制作して、夕方からは会合などで出掛けていく毎日だったので、今思うと、構って欲しかったんでしょう。

家には、常にお弟子さんが2、3人は居ました。夕方からはお弟子さんたちの制作や練習の時間になるのですが、ちよっかいを出しては叱られました。お仕置きは地下の土置き場や大甕に入れられるか、柱にくくりつけられるかでした。お客さんの出入りも多かったと思います。四



窯で使う薪置き場(昭和52年頃)

谷シモンさんや池田満寿夫さん、現代アーティストの方にも遊びに来ていて、「変テコな大人たちだなあ」と子ども心に思っていました。

幼い頃、土遊びはしていましたが、父の焼物の手伝いはしたことはなかったし、反抗してはいたわけではなかったのですが、焼物をやりたいとは思ったことはありませんでした。父からも一度も言われたことはなかったです。中学校、高校の前半まではスポーツ系の部活をしていましたが、高校2年生の頃から彫刻に興味を持ち始めました。はっきりとした理由はないのですが、強いて言えば、家には分厚い作品集とか美術の本がたくさんあって、幼少の頃から何気なく見ていたことが切っ掛けかもしれない。それから美術部に入ってデッサンを始めました。同時に、美術大学に進みたかったので美術予備校にも通い始めたので、家に帰るのは夜という日々でした。

大学に入ってから、木彫をしていたのですが、作品が木でなければいけない理由を模索する中で、素材というものを考えていくうち「土」を焼く事に興味を湧いてきました。土を焼くというか、土で何かをしたというのを父に伝えときの反応は、ついでのような感じで「ふうん」って返事でした。飄々としている父です。父との会話はいつもざらりとした感じで、概ね仰々しい会話はありません。

焼物を始めてからは父との会話の機会が増え、親子関係が積み重なってきているような気がします。備前に帰って間もない頃、何代目とかではなくて自分の名前で作品を出す作家である以上は、自分の世界を見つけていかないとけない」という言葉をよく聞きました。そのお蔭か、妙なプレッシャーは無く、自分にしか掘り下げる事ができない道に集中することができています。

自分も父親になって、子どもには、色々なものを見て感じて、自分のやりたい事を見つけていったらいいんじゃないかなと思います。(談)

伊勢崎晃一郎
備前焼作家

1974年備前市伊部生まれ。人間国宝(2004年7月認定)伊勢崎淳の長男。東京造形大学彫刻科卒業後、ニューヨーク在住陶芸作家ジェフ・ジャビロに師事。2000年に帰国し、備前で作家活動始める。現代備前焼の将来を切り開く旗手として期待される。2014年(第15回)福武文化奨励賞。



FACE

公益社団法人 岡山青年会議所 2016年度第66代理事長

佐野 範一 さん

「そのときに起こっている
新しい社会問題に取り組む」

「キッズビジネスパーク」って知ってますか？

岡山青年会議所が年1回行っている

子どもたちの夢がしを応援する事業です。

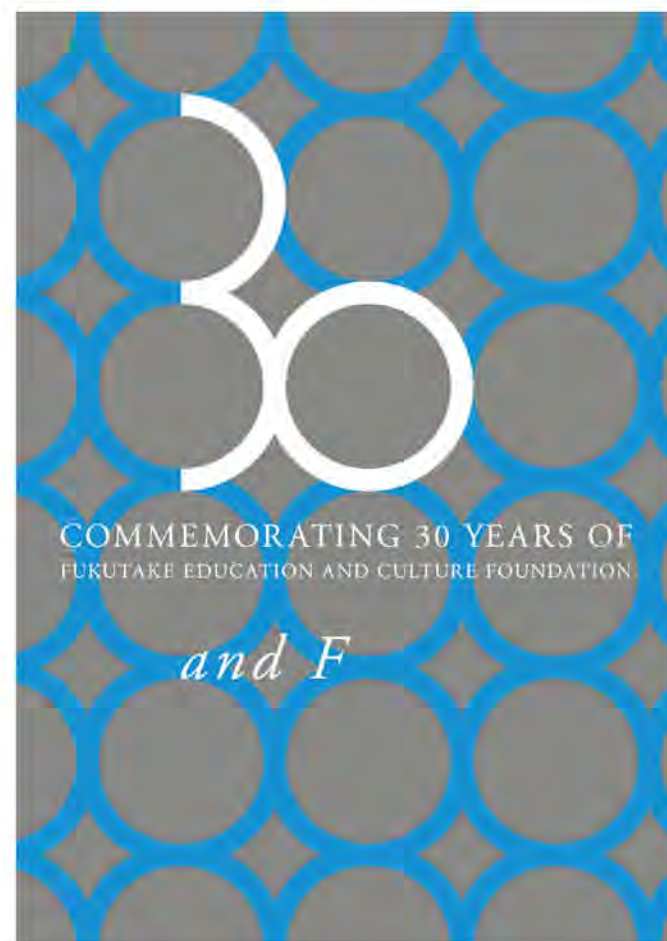
第66代理事長を務めた佐野範一さんに

この事業に取り組む、

同会議所の思いなどを伺って来ました。

地元の様々な企業に協力してもらい、子どもたちに職業体験してもらおうという催し、「キッズビジネスパーク」は参加定員500名のところ1200名もの応募申込がくるほどとても人気が高い。「回を重ねるごとに応募数が増えてきています」と爽やかな笑顔で佐野さんは答えてくれました。

財団設立30周年記念誌「and F」を発行



2016年8月29日、公益財団法人福武教育文化振興財団は発足して30年になりました。この記念誌では、次の30年にも通用するメッセージをと、財団活動でお世話になった方々、関わりのある方々の珠玉の言葉を集めてみました。どの言葉も、豊かな未来を享受できる可能性に満ちたものです。みなさまの何らかの指針、エールとして受けとめていただければと思います。

タイトル「and F」(アンドエフ)は、財団を身近に感じていただける愛称のようなものとして名付けたものです。Fは福武教育文化振興財団のこと、そしてandの前にくるのは、地域で活動するみなさまをイメージしています。地域の一人ひとりに寄り添う財団でありたいという願いを込めています。

きっかけは、教育の問題や家庭の問題が多い中で、子どもたちが将来を描く、未来を描く機会が不足しているのが、一番問題なのでは？という思いから始まったそうです。

岡山青年会議所のメンバーは現在90名。それぞれ自分たちの仕事を持っており、その仕事を終えた後さまざまな事業について議論します。多いときは週3、4日。それに加えて月1回の理事会、例会などで話し合いが行われます。

「キッズビジネスパーク」事業もその1つ。「岡山になくはないよね」と言われるような事業にすることが、いざ子どもたちを成長させ、そこに好循環が生まれる。「たとえば100人しか集まらなくても、その100人が本当に自らの意欲に関心を持つことができれば、きっとその事業は成功だと思う」と深い思いを語った。

「キッズビジネスパーク」には岡山東商業高等学校や岡山商科大学の学生約140名ものボランティアスタッフが協力している。高校1年生で初めてボランティアに参加した生徒が、今は3年生になっていて、後輩に「キッズビジネスパークって楽しいよ！ボランティアするって楽しいよ！」と引き継ぐそうです。

青年会議所が企画して始めた事業は、他の団体へ受渡し、継続しているものもたくさんあります。青年会議所としてはそのときに起こっている新しい社会問題に取り組むのがスタンスだそうです。

自分の将来の夢を求めて参加する子どもたち、それを支えてあげたいと願う学生ボランティア、忙しい時間を割いて岡山の未来のために日々活動する岡山青年会議所のメンバー。

理事長としての任期は1年間なので、現在は第67代理事長が活躍していますが、岡山青年会議所の66年という長い歴史の中で、「その大切な1年間」がずっと続いていくことを願っています。

公益社団法人岡山青年会議所

明るい豊かな社会の実現を目的とし、次代を担う青年経済人(20歳～40歳)が所属。おかやまに住み暮らす人々や子どもたちの笑顔のために活動を行っている団体。1951年設立。66年の歴史を持ち、全国に約700ある青年会議所の中でも9番目にできた非常に歴史のある青年会議所。平成28年度教育活動助成対象者。

<http://www.okjc.org/2016/>

- 財団設立30周年記念誌「and F」発行
- 公益財団法人福武教育文化振興財団アートディレクション&デザイン
- 佐藤豪人(HIDE TO SATO DESIGN)
- 編集協力・制作 株式会社吉備人

◎「and F」送付ご希望の方は財団までご連絡ください。なお、送付はおひとり様1冊とし、予定数に達しましたら終了させていただきますのでご了承ください。





田中園子

Tanaka Sonoko

写真家/1975年東京都生まれ、岡山市在住。関西学院大学社会学部卒業。2016/「SUMMER 2016」(gallery A-zone)、2014/「PHOTO」(gallery A-zone)、APAアワード2013写真作品部門入選、「NTMY ISSUE.2 EXHIBITION」(青森県十和田市現代美術館 Towada Art Center)、2012/岡山県美術展覧会写真部門奨励賞、2010/写真集「3DK」刊行

表紙写真：倉敷町家トラスト
<http://kurashiki-machiya-trust.jp/>

つづく

田中園子

「こんにちは」暖簾をくぐると、土間にはひんやりとした空気が漂う。大きく息を吸い、古い民家特有の懐かしい匂いで満たされる。昔は小間物屋だったという「店の間」は、表のガラス戸と坪庭からの光でほのかに明るい。

現在「倉敷町家トラスト」の事務所であるこの長屋は昭和初期に建てられ、坪庭の奥にある蔵は明治から大正期のものだという。代表の中村さんに案内して頂いた室内には、所々昔の住人の生活が残る。台所にはレトロな壁紙、2階には薬局を営んでいた家族のものだろうか、小瓶がひっそりと整列していた。そんな長家の歴史を引き継ぎながらも、アルミサッシを木製窓枠へと戻すなど長屋として再生されている。

「昔の家は規格が統一されていて、表戸や襖は隣近所で交換・再利用ができました」「畳もよいものを手入れし続けられれば40年は持つそうです」と中村さんは言う。蔵では小さな滑車の働きに驚き、黒竹とモス地で手作りされた「古典はたき」に魅せられた。「モス地は手で裂くと真つすぐに切れて、ほころばないんです」「小さな生活の知恵が、いつのまにか生きる哲学にも聞こえてきた。ふと横をみれば細い趣のある一本道。」「そこはおそらく下肥を運ぶ道です」

取材中、何人かの方が「こんにちは」と暖簾をくぐる。数年前に電柱が地中化された表通から観光客がガラス越しに視線を投げる。ほのかに明るい店の間の畳の上で過ぎ行く人々を眺めながら、綿綿と続いて循環しているものへと想いを馳せた。

Editor's Column

■電車に座った人達が一人残らず無言でスマホを触っている光景を見かけると、なんだか気持ち悪くなるのは昭和時代の私だけでしょうか。少し前まで、一家に一台だけの「電話」があり、捨てられない思い出の「手紙」の束があり、何度も聴きなおした「LPレコード」がありました。今はスマホ一台で事足ります。■アナログ世代には、読み返した手紙や忘れられない30cm四方のジャケットが青春時代を思い出させてくれるのですが、スマホ世代は、何を手がかりに青春時代を振り返るのでしょうか。■誰とも連絡がとれず、一人で孤独を感じながら過ごすことも時には必要ではないでしょうか。スマホを置いて、じっくりと一人で考える時間こそ、これからの時代には不可欠だと思います。時代の変化という波にそれなりに対応しながら、何とか流されないようにしたいものです。(O)



公益財団法人

福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0807 岡山県岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3階
TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190
URL: <http://www.fukutake.or.jp/ec/>
E-MAIL: eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEK1 vol.62 2017.1.25

編集・発行:

公益財団法人福武教育文化振興財団

制作:株式会社吉備人

デザイン・イラスト:タケシマレイコ

印刷:株式会社三門印刷所